



べんけい通信

vol.8
2025.2

NEWS LETTER 担当：東山歯科医師会 会長
奥田 歯科医院 院長 奥田 啓之 先生

オーラルフレイルと多職種連携

口腔機能は1つだけでなく、歯や舌、口唇などの運動機能や筋力、唾液分泌などいくつかの機能が複合的に働くことで、咀嚼嚥下、発音、呼吸などの機能を支えています。口腔機能の低下は、咀嚼困難の一因となり、食品摂取の多様性を低下させ、食事摂取に影響を及ぼします。オーラルフレイルは、歯の喪失や食べること、話すことに代表されるさまざまな機能の『軽微な衰え：噛みにくさ、食べこぼし、むせ、滑舌の低下、口渇感』が重複し、口の機能低下の危険性が増加しているものの、改善も可能な状態です。オーラルフレイルは最終的にはフレイルやその先の要介護リスクを高め、食の楽しみを奪いQOLをも低下させると報告されています。具体的には身体的フレイルへのリスクが2.4倍に、オーラルフレイルと身体的フレイルを併発すると要介護に認定されるリスクが2.8倍に上がることが報告されています。ただ、口腔機能は、1つの機能が低下したとしても、他の機能によって補填されるため機能低下がマスキングされやすく、またその兆候が軽微であるため早期の発見が困難で予防、対策が遅れることが課題です。

昨年4月、オーラルフレイルの概念と定義をより理解しやすく、かつ評価しやすくすることで、特に口腔機能に関するフレイルの啓発および多職種連携の推進を目的として、日本老年医学会と日本老年歯科医学会、日本サルコペニア・フレイル学会は共同で「オーラルフレイルに関する3学会合同ステートメント」*を発表しました。

この中でオーラルフレイルの要点を医療関係者向けと一般市民向けに概念図（裏面）としてまとめるとともに新たにオーラルフレイルのチェック項目「Oral frailty 5-item Checklist：OF- 5」が開発されました。特別な検査機器がなくても検査することができ、歯科医療職が不在の場でも府市民自身や歯科職種以外の多職種で評価可能である点が特徴です。OF-5で評価した場合、地域在住高齢者の約4割がオーラルフレイルに該当し、フレイル、食品摂取の多様性、社会交流、要介護認定、および死亡と関連するとされています。

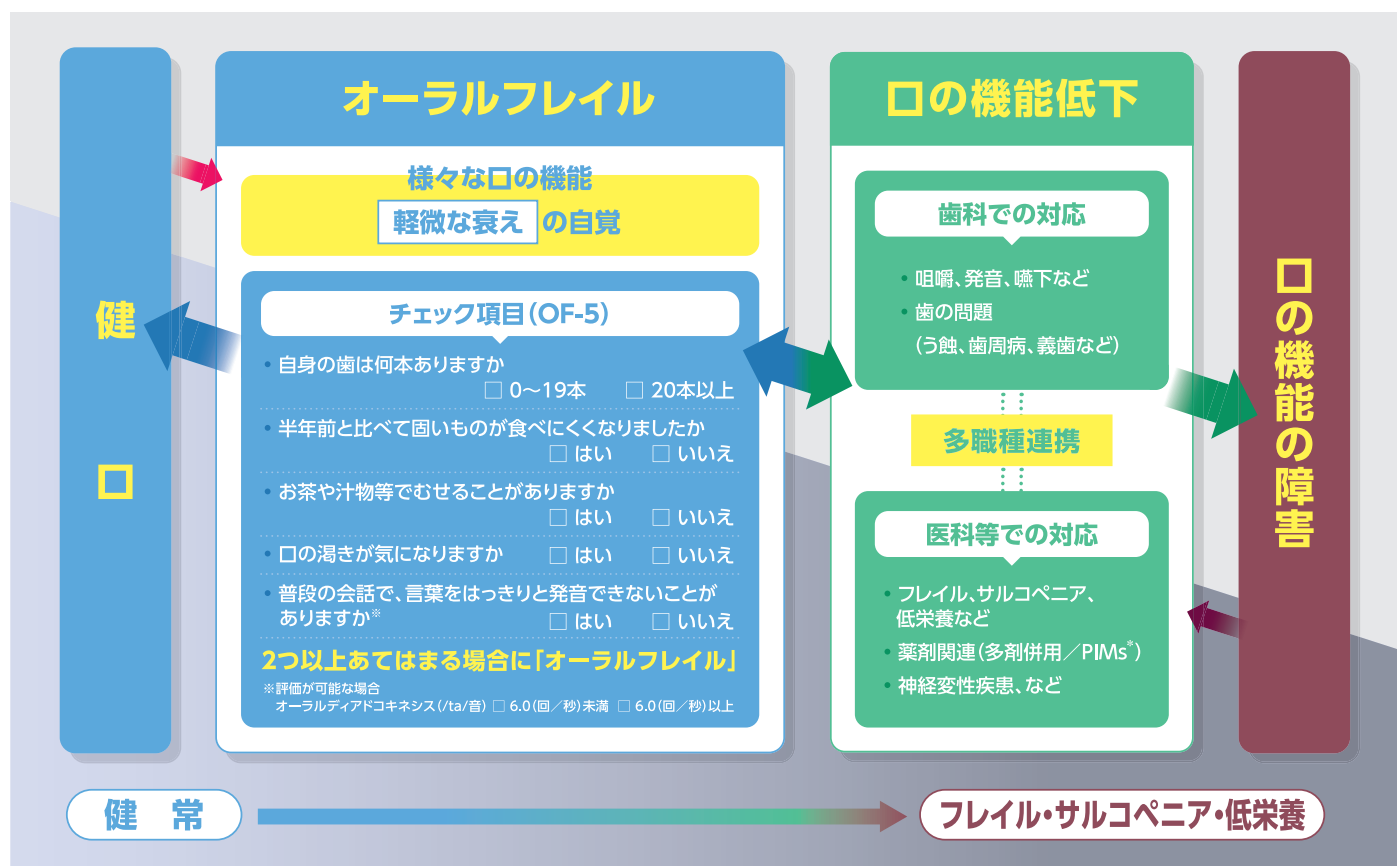


オーラルフレイルが進行すると「口の機能低下」に陥りますが、この段階では歯科医療専門職による口腔機能や歯の問題への直接的な介入はもとより、フレイル・サルコペニア・低栄養といった全身性病態への対応、多剤併用など薬剤の問題もこれらの危険因子であることから、多職種分野に関連する包括的な対応が必要です。

このように府市民に対してオーラルフレイルの予防啓発から早期発見、口の機能の低下に至るまでのそれぞれの段階で、歯科医療専門職と多職種が協働により対応することで、食べる、飲み込む、話すなどさまざまな「口の機能の障害」および身体的フレイル・社会的フレイル・サルコペニア・低栄養といった次のレベルの障害の発症や重症化を食い止めることが求められます。

※オーラルフレイルに関する3学会合同ステートメント 老年歯学 38 - 4 (2024) E86 ~ E90

★ オーラルフレイル概念図 専門職種向け



*Potentially Inappropriate Medications (潜在的に不適切な処方)

一般社団法人 日本老年医学会
一般社団法人 日本老年歯科医学会
一般社団法人 日本サルコペニア・フレイル学会

発行：京都市下京区・南区・東山区在宅医療・介護連携支援センター

〒601-8452 京都市南区唐橋堂ノ前町 15-9 エステート南ビル 301

一般社団法人 下京西部医師会内

電話：075-693-8677 FAX：075-693-3677

ホームページ：https://www.ishikai.or.jp/renkei-center/

E-mail：shimominami-ikai@ishikai.or.jp

